

茨城県北浦に流入する小河川への チャネルキャットフィッシュの侵入

霞ヶ浦チャネルキャットフィッシュバスターズ 平山 拓弥

チャネルキャットフィッシュ
(図 1) は北アメリカ原産の魚
類・無脊椎動物食性の淡水魚であり、霞ヶ浦では最も優占する外来
魚種で、地域の水産資源の食害、
背鰭・胸鰭の棘による漁業者の負
傷などの被害をもたらしている。
本種の成魚の季節的な移動や生息
場所利用については、北アメリカ
の湖沼や大河川でいくつかの報告



図 1 霞ヶ浦（北浦）で採集されたチャ
ネルキャットフィッシュ

がある。国内においても、湖沼で季節的な移動が確認されているほか、利根川や阿武隈川、矢作川などの大河川での生息分布状況が把握されている。しかしながら、国内外を問わず、流程 10 km に満たない小河川での生息場所利用はよくわかっていない。最近、国内では湖沼に流入する小河川が水産有用種や絶滅危惧種の生息場所となっていることが示されており、小河川における本種の侵入状況の把握は急務である。本研究では、本種の小河川への侵入状況を明らかにするため、2015 年 7 月下旬–8 月上旬の夜間に、霞ヶ浦（北浦）に流入する雁通川と蔵川の中流域（堰の上流側と下流側）と下流域および河口付近の湖岸の各地点に、餌付きの置き針を 100 針ずつ設置し採集調査を行った。その結果、125 個体（体長 21.0–60.5 cm）が採集され、両河川ともに河口から約 1 km の中流域（雁通川では垂直堰の下流側、蔵川では緩傾斜堰の上流側）にまで侵入していた。本種の個体数密度と環境要因（水温、溶存酸素量、水深、流速、底質など）との関係を一般化線形混合モデルで解析したところ、上位モデルでは水深と泥分が正の要因、流速が負の要因として多く選択された。本種が定着した湖沼の小規模な流入河川には、移動の妨げとなる堰堤等がない限り、本種が侵入する恐れが高く、今後、河川内での防除について早急に検討することが必要である。